重要文化財
公開

平成 21 年度　首里城京の内跡出土品展

大型青磁が彩る緑の空間

～海を渡った焼物～

開催期間　平成 22 年 1 月 23 日（土）～ 2 月 7 日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター

目　次

ごあいさつ ……1
首里城「京の内」跡とは ……2
重要文化財指定基準 ……3
重要文化財指定の名称と指定理由 ……4
重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧 ……5
青磁とは ……6
首里城京の内跡出土の青磁 ……7
大型製品について ……9
沖縄本島出土の大型青磁
～流通と消費をグスクと集落遺跡から考える～ ……21

【凡　例】

1．本書は、重要文化財公開首里城京の内跡出土品展「大型青磁が彩る緑の空間～海を渡った焼物～」（開催期間 2010（平成 22）年 1 月 23 日から 2 月 7 日）を補完するものとして編集・作成したものである。

2．企画等は山本正昭、知念隆博が担当した。また、各項目の執筆者は文末に記した。

3．掲載写真の撮影は矢舟章浩、伊禮若奈が行った。また、本書に掲載されている写真・図面等の無断使用は固く禁ずる。

4．調査報告書に記載されている資料名と本書に記載されている資料名が一部異なるものが存在する。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものである。

5．本図録の作成にあたって、金沢陽（財団法人 出光美術館）、池田榮史（琉球大学法文学部）の両氏に指導と助言を賜った。記してお礼申し上げる。

ごあいさつ

かつて、琉球王国は中国との冊封体制のもと、朝鮮・日本・東南アジア周辺諸国との交易をとおして経済的な繁栄をもたらし、独自の歴史と文化を形成した大交易時代を築きました。

その栄華を謳った「万国津梁の鐘」（1458 年鋳造）の銘文にも知られるように、当時の繁栄ぶりを示す貴重な資料が、首里城京の内跡から発見された多量の貿易陶磁器です。

首里城跡京の内地区の発掘調査は、平成６年度（1994）～平成９年度（1997）までの４カ年間実施されました。平成６年度の遺構確認調査によって、倉庫跡（1459 年火災で焼失）から一括で出土した陶磁器は、14 世紀中頃～ 15 世紀中頃に中国をはじめ東南アジア各地で生産されたもので、世界的にも貴重な資料が含まれていることがわかりました。そして、出土したこれらの陶磁器は、我が国の歴史上、意義深く、かつ、学術的価値の特に高いものとして 平成 12 年６月 27 日付けで国の重要文化財（考古資料の部）に指定されました。

首里城内郭の南西部に位置する京の内は、「神が降臨する聖域」或いは「霊力のある聖域」という意味があり、当時の琉球国王即位式などの王国の重要な儀礼や祭祀などが執り行われた祭場である事から、京の内跡出土陶磁器は、儀式や祭祀などに供された貴重な品々であると考えられています。

今回の企画展では、「大型青磁が彩る緑の空間～海を渡った焼物～」と題し、出土品の約六割を占める青磁の中から、希少な大型青磁に焦点をあて公開いたします。「盤」「鉢」「瓶」「壺」「水注」などの大型青磁は、日常生活で使用された「碗」「皿」などに比較すると、威信財（ステータスシンボル）や鑑賞用としての側面も持ち合わせていることが窺えます。

この機会に、当時の琉球国王も眺めたであろう、鮮やかな緑で彩られた様々な大型青磁をご覧いただくとともに、県民共有の財産でもある国指定重要文化財に対する皆様のご理解が深まれば幸いです。

平成 22 年１月 23 日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　玉　栄　　直

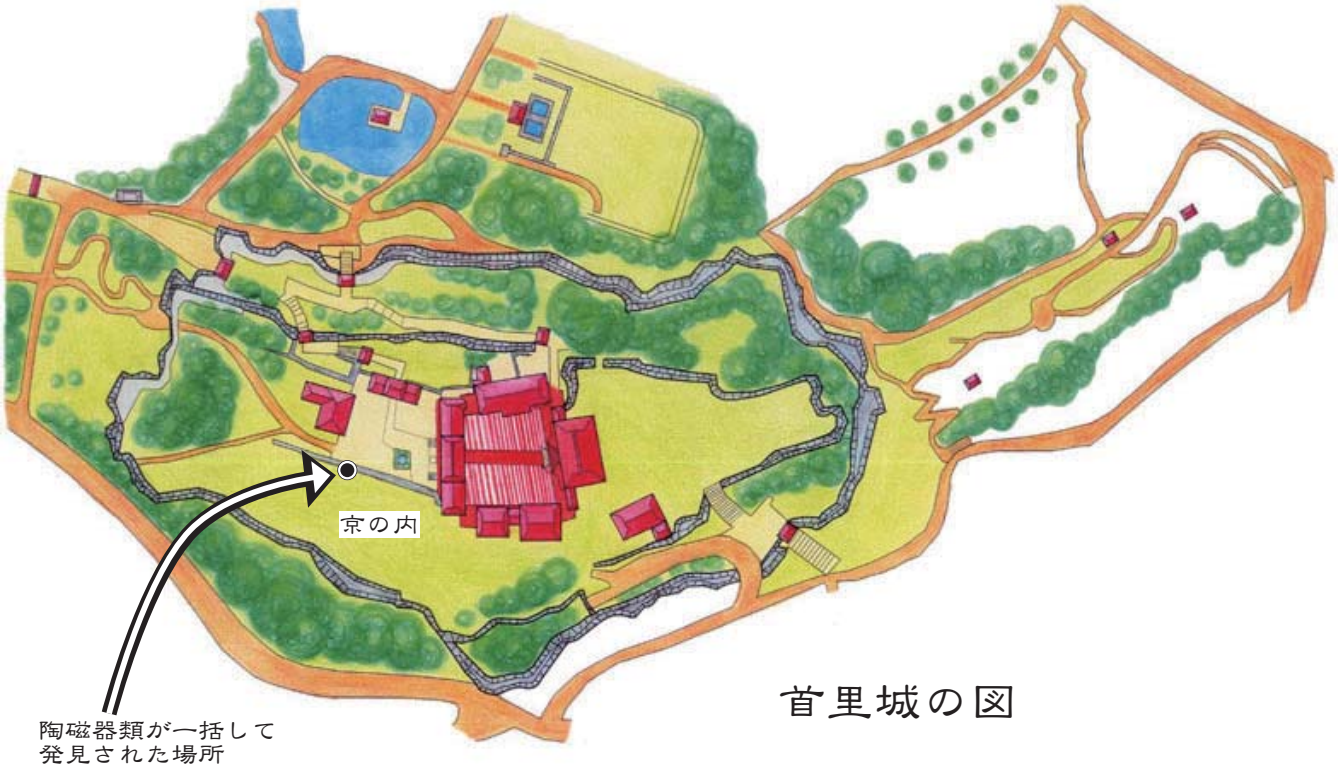
首里城「京の内」跡とは

首里城京の内跡は、正殿（せいでん）、南殿（なんでん）、北殿（ほくでん）、奉神門（ほうしんもん）などの政事（まつりごと）（政治）を行う建物が集中する区画の南西地区に位置し、面積は約 5,000 ㎡と考えられています。

「京の内（きょうのうち）」の「京」は、“ 霊力（セジ、シジ）” と同義語であり、その他にも神が降臨もしくは来訪する岩山や小島（南城市斎場御嶽（せーふぁうたき）の大岩を “ キヨウノハナ ”、また、名護市嘉陽集落の東海上にある小島を “ きょう ” とも称す）等の名称から、首里城「京の内」は、「神が降臨する聖域」と理解されると共に「霊力のある聖域」と解されます。

さらに「京の内」には、絵図や文献などから沖縄の開闢二神（かいびゃくにしん）降臨の御嶽（拝所）とされる、“ 首里森御嶽（しゅりむいうたき） ”・“ 真玉森御嶽（まだまむいうたき） ” の二つの御嶽以外に、「京の内之三御嶽（きょうのうちのみうたき）」と称された三つの御嶽が存在したようです。

重要文化財指定を受けた資料は、沖縄県教育委員会が 1994 年から 1997 年にかけて実施した復元整備事業に伴う発掘調査で、京の内北西地点から、火熱を受けた状態で中国陶磁器をはじめとする多くの陶磁器類が一括して発見されたものです。文献や出土品の内容などから、倉庫跡（3m × 4m）と考えられています。



首里城の図

重要文化財指定基準

◎ 考古資料の部

重要文化財

一　土器、石器、木器、骨角牙(が)器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの

二　銅鐸(たく)、銅剣、銅鉾(ほこ)その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

三　古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

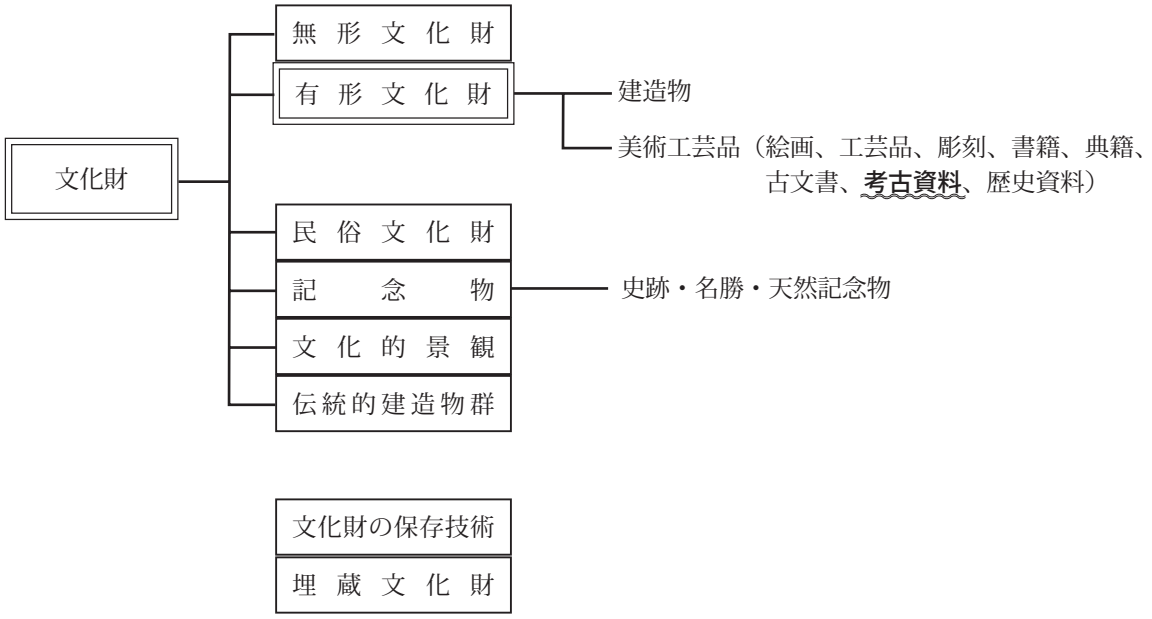
四　宮殿、官衙(が)・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの

五　渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準、・（中略）・基準（抄）(昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会　告示第 2 号)〔最終改正〕平成 8 年 10 月 26 日文部省告示第 185 号より一部抜粋。

◎ 文化財の種類

（平成 17 年 4 月 1 日施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たな文化財として位置付けられた）



・建造物、絵画、工芸品、彫刻、書籍、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文 化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財 と呼んでいます。このうち、建造物以外のものを総称して「美術工芸品」と呼んでいます。

国は有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に 価値の高いものを国宝に指定して保護しています。

※ 首里城「京の内跡」出土の陶磁器等は、「国宝及び重要文化財指定基準」の「考古資料の部」で、国の「重要文化財」として指定を受けたことになります。

重要文化財指定の名称と指定理由

（考古資料の部）

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　　518 点

附　一、金属製品　　一括

附　一、ガラス玉　　一括

所　有　者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（庁保美第３の３号平成 12 年６月 27 日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説 明 文：　　尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は霊力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽（しゅりむいうたき）は琉球王国の最高神女である聞得大君（きこえおおきみ）が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成６～７年度に実施され、約 2000 平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順３年 (1459) に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね 14 世紀中頃から 15 世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に２点と景徳鎮窯跡出土の破片１点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充満する」(訳文の趣旨) とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成 12 年６月号より抜粋）

※ 官報告示：平成 12 年６月 27 日付け文部省告示第 120 号

※ 文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 27 条第１項の規定により、平成 12 年６月 27 日付けで重要文化財に指定。

重要文化財　首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財　考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　518 点

附（つけたり）　一、金属製品　一括

附（つけたり）　一、ガラス玉　一括

重要文化財 陶磁器内訳

種　類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁（289 点）	碗（わん） 103	皿（さら） 117	盤（ばん） 32
	壺（つぼ） 20	大花瓶（おおかびん） 2	馬上杯（ばじょうはい） 1
	水注（すいちゅう） 3	瓶（びん） 5	香炉（こうろ） 3
	水滴（すいてき） 1	花盆台（かぼんだい） 1	大鉢（おおばち） 1
白磁（はくじ）（33 点）	碗 14	皿 11	杯（はい） 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付（げんそめつけ）（2 点）	馬上杯 1	大合子（おおごうす） 1	
明染付（みんそめつけ）（58 点）	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵（いろえ）（3 点）	碗 2	皿 1	
紅釉（こうゆ）（1 点）	水注 1		
瑠璃釉（るりゆ）（2 点）	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器（かつゆじき）（1 点）	碗 1		
褐釉陶器（かつゆとうき）（35 点）	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋（ふた） 1	特殊壺 1	
	蓋（ふた） 1		
白釉陶器（はくゆとうき）（3 点）	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器（さんかつゆとうき）（55 点）	壺 55		
タイ産半練土器（さんはんねらどき）（22 点）	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器（3 点）	瓶 1	水注 2	
備前ほか（本土産）（6 点）	擂鉢（すりばち） 1	甕（かめ） 3	壺 2
瓦質土器（沖縄産）（5 点）	蓋 5		
合計　518 点			

青磁とは

青磁とは、通常素地や釉薬が緑ないし青色系の色調となる磁器を総称しますが、同じ成分の素地や釉薬で黄色または黄褐色に焼成されたものも含めることがあるなど、その定義には様々な見解がみられます。陶磁器の中では極めて長い歴史を持っており、古くから中国をはじめ朝鮮・日本・ベトナム・タイ・ミャンマーなどで生産されています。

青磁の持つ独特の色は、釉中に含まれた微量（１～２％）の酸化第二鉄が還元されて酸化第一鉄となって発色するもので、酸化第二鉄の量が１％未満なら透明に近い色となり、10％を超えると黒に近い色になります。

中国では、千度以上で焼成された施釉陶磁器を瓷器（磁器）と総称します。木灰や石灰を原料とした釉薬は高火度で溶けてガラス質の皮膜となり、堅く焼きしまった灰釉陶器が完成します。中国ではこれを「原始磁器」または「原始青磁」と呼び、青磁の先駆的なやきものとして位置付けています。

原始青磁が誕生したのは商（殷）代中期（紀元前 16 世紀頃）で、当時は国外への輸出品ではなく、明器（墓に副葬品として納められる祭祀用の器）を主体に生産していました。その後、西周後期から春秋・戦国時代に長江下流域で技術が発達し、大型製品や青銅器を忠実に模倣した製品などが生産されました。戦国時代後期から漢代は一時生産が停滞しますが、唐代には浙江省越州窯で青磁生産が本格化するようになります。

越州窯の青磁は国外へ本格的に輸出された最初の製品で、その流通範囲はアジア全域に及び、遠くはエジプトにまで到達しています。この青磁は日本にも輸入されており、『源氏物語』にもその名をみることができます。

宋代になると青磁生産は更に盛んになり、特に南宋代では浙江省龍泉窯と福建省同安窯が一大生産地として、輸出用の青磁を焼造するようになります。日本にも膨大な量の青磁がもたらされ、沖縄に初めて青磁が登場するのもこの時期です。ただし、中国から直接青磁を輸入していたのではなく、日本を経由して運ばれたとされています。

沖縄が中国との直接交易を開始したのは元代と思われますが、明代になると中国との朝貢関係に基づく進貢貿易によって、大量の青磁が輸入されるようになります。沖縄はこれらの青磁を東南アジア各国との中継貿易に使用することで、『万国津梁鐘』の銘文にみられるような繁栄を遂げたと考えられます。

以上のことから、青磁は中国を代表するやきものであるとともに、グスク時代の沖縄を語る上で欠かせないやきものであるといっても過言ではないと思われます。

（新垣力）

首里城京の内跡出土の青磁

1945（昭和 20）年の沖縄戦と戦後の琉球大学設置による造成工事で首里城は大部分が失われてしまいました。その後の首里城公園整備により京の内跡の復元が進められ 2003（平成 15）年から一般公開され、内部を見学することができるようになりました。かつては鬱蒼とした森の中に 4 または 5 箇所の御嶽があったと考えられ、その姿が現在、史跡整備によって甦りつつあります。しかし、この姿は約 400 年前のもので、それより以前については発掘調査により大量の陶磁器が出土したことから御嶽とは異なる別の姿が存在し、それが調査、研究を通して浮かび上がろうとしています。今回公開する青磁はかつて別の姿をしていた京の内を知る上で欠かすことのできない歴史の証言者であると言えるでしょう。

この首里城京の内跡から出土した青磁は現在、報告されているもので総計 610 点を数え、大型のものでは壺や瓶、鉢、器台などが確認されています。小型のものは、碗 202 点、皿 268 点、高台付杯 2 点、花盆台 2 点、香炉 1 点が確認されています。その中でも碗と皿は青磁全体から見ると 8 割近くを占めていることから、首里城京の内跡における青磁の主要な器種であったと言えます。これらの大半は 14、15 世紀において青磁の一大生産地であった中国福建省の龍泉窯（りゅうせんよう）並びにその周辺で焼造されたものです。龍泉窯はやや内陸に位置しているため、河川を使った水路で沿岸部まで運ばれ、14、15 世紀に琉球の人々が頻繁に訪れていた福州や泉州をはじめとする福建省の沿岸都市から、これらの青磁が大量に荷出しされたと考えられます。

検出直後のようす

大型製品については、直接中国明の皇帝から下賜（※1）された品々が多く含まれていますが、碗、皿をはじめとする小型製品はそのほとんどが民間の窯で焼造されたものです。そのため、碗や皿の底部に製作の際に付いた傷や粘土、砂粒がそのまま残っており、不良品と思われるものが数多くみられます。このように質の良し悪しが認められる青磁は 14 世紀中頃から 15 世紀中頃にかけて生産され、首里城にもたらされたもので、その量と種類から当時において環シナ海をまたにかけて活動していた琉球王国とその周囲で関わっていた人々の姿を彷彿とさせます。

首里城京の内跡から出土した遺物は 15 世紀中頃の火災によって埋められた陶磁器の一括資料でもあり、石積みで囲われたくぼみ（3 m× 4 m）から大量に出土しました。火災により火熱を受けた痕跡は表面の光沢が失われて器の表面に微小な孔が多く観察できる他、高熱により赤色やピンク色に変色しているもの、煤（すす）の付着が見られるものなどがあります。

また文献記録では 15 世紀中頃に首里城が 2 度の火災に遭っていることが記されています。1 つは 1453 年に王位をめぐって争った尚志魯・布里の乱（※2）に伴う火災ともう 1 つは 1459 年に首里城内からの失火によるものがあります。現在のところ、1459 年の火災で使えなくなった陶磁器がまとめて埋められた遺物として報告されています。当時は木造の建物が主体であったことから、火災による被害が相当あったものと想像され、これらは当時の火災の痕跡を生々しく今に伝えています。高熱を受けている青磁はすべて破片であり、本来の色や形が失われてしまっていますが、首里城の中で道具としてその命脈を終えた資料として見ることができます。

（山本正昭）

※1　身分や位の高い人から分け与えられること。
※2　叔父、甥の関係であった尚志魯と尚布里との間でおこった王位継承をめぐっての内乱。この内乱の結果、尚志魯と尚布里共に倒れ、初代王である尚巴志の第 5 子である尚泰久が第 5 代目の王位に就いた。

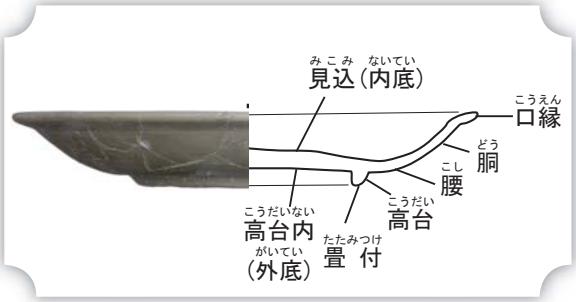
首里城京の内跡出土陶磁器（重要文化財）

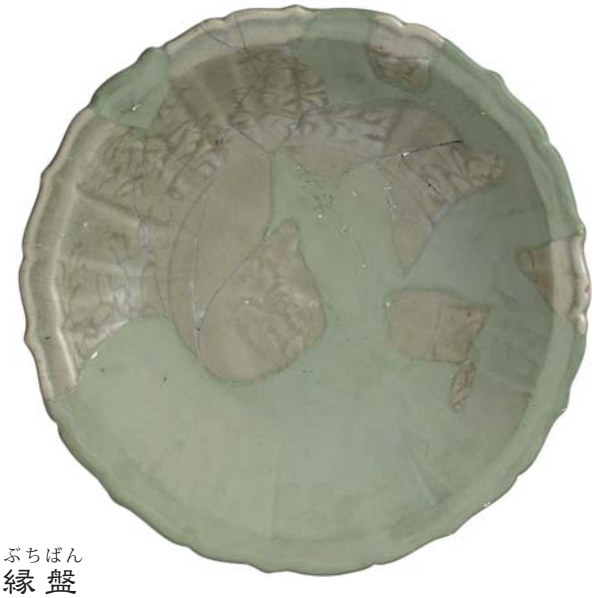
大型製品について

沖縄県内の遺跡から出土する青磁の大型製品は、盤（ばん）、瓶（びん）、鉢（はち）、壺（つぼ）、水注（すいちゅう）等を主とし、碗や皿等の日常的に使用されたと考えられる小型製品に比べると出土点数は少なくなります。京の内跡の建物跡から出土した青磁では約 610 点のうち約 130 点が大型製品であり、そのうち約 100 点は盤となっています。大型製品は盤の様に日常でも使用されたと考えられるものもありますが、大型瓶のように特別な器であったと考えられるものもあります。ここで紹介するのは、京の内跡の建物跡から出土した資料のうち、盤、鉢、壺、器台（きだい）、瓶及び水注です。時期としては 14 世紀後半から 15 世紀にかけて生産されたものと考えられています。

盤

浅く平らな形で、食物等を盛るために使用された大皿です。京の内跡出土の大型製品としては最も多く、文様や口縁形態も様々であり、数種に分類することができます。ここでは、口縁部が鍔（つば）を作るものと直口のものとに大きく分類しています。





鍔縁盤（つばぶちばん）

口径 33.2cm　器高 6.6cm　底径 15.4cm

鍔を平坦に作り、鍔縁（つばぶち）を稜花（りょうか）状に仕上げています。内外側面共に蓮弁文（れんべんもん）を施しますが、内側面は蓮弁文の上から牡丹唐草文（ぼたんからくさもん）を描いています。内底には印花（いんか）による菊文を施しています。外底は全面に釉薬をかけた後に蛇の目状に掻き取られています。

※印花：型を押し付けて文様を描く方法です。

つばぶちばん
鍔 縁 盤

口径 25.2cm 器高 6.7cm　底径 8.5cm

鍔端を上方に摘み上げた盤。外面は無文で、内側面に牡丹唐草文、内底に印花文（花の種類は不明）を施しています。外底は釉薬をかけた後に掻き取られています。外底には、焼成のときにこの盤を支えていたと考えられる陶土が付いています。

つばぶちばん
鍔 縁 盤

口径 33.8cm　器高 4.9 ～ 5.3cm　底径 16.2cm

鍔を平坦に作り、内側面に牡丹唐草文、内底に牡丹唐草文と七宝繋ぎ文を施しています。外底は釉薬をかけた後に掻き取られています。

※七宝繋ぎ：円を四つ重ねて繋いでいく文様をいいます。本来は仏教で７種の宝物をいっていたことから、宝物等の装飾を表してきたと考えられます。また、中国では銭をあらわします。

つばぶちばん
鍔縁盤

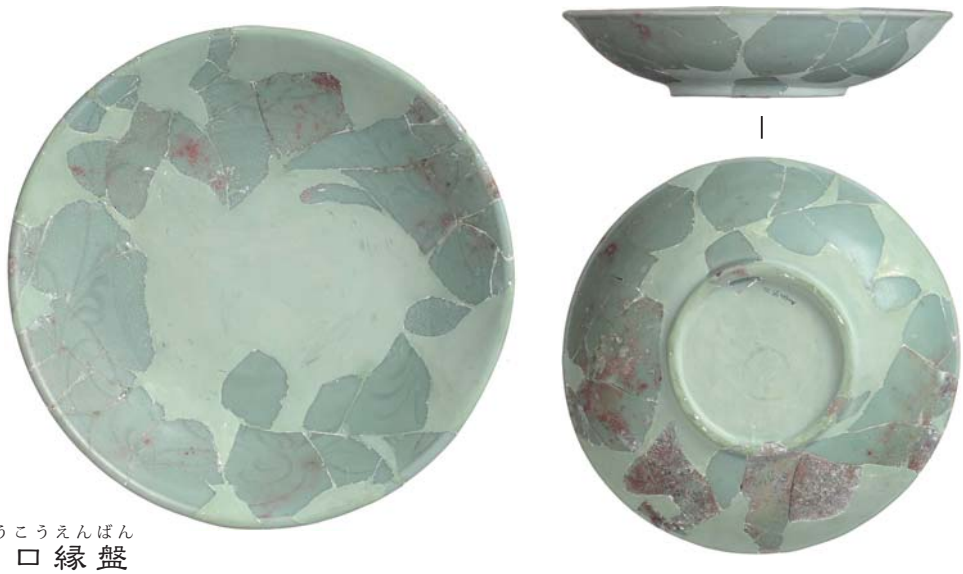
口径 25.8cm 器高 5.9cm　底径 10.0cm

　鍔端を上方に摘み上げた盤。内側面に蓮弁文、内底に印花により牡丹文を施しています。外底は釉薬をかけた後に蛇の目状に掻き取られています。

ちょっこうこうえんばん
直口口縁盤

口径 28.1cm　器高 4.0cm　底径 15.0cm

　口縁を僅かに玉縁(たまぶち)状に作っています。内側面は６つに区切り吉祥文(きっしょうもん)を施し、内底には印花で牡丹唐草文を施しています。外底は釉薬をかけた後に蛇の目状に掻き取られています。



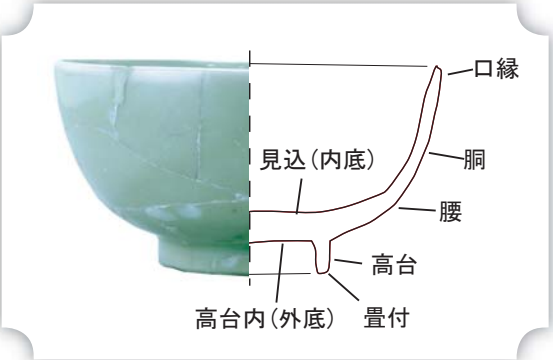
ちょっこうこうえんばん
直口口縁盤

口径 28.2cm　器高 14.2cm　底径 6.5cm

口縁部は僅かに外側に反っています。内側面に牡丹唐草文を施しています。底部は大部分を欠損しているため、文様や作りが不明となっています。赤色部分は、火災にあった痕跡と考えられます。

鉢

口の開いた深さのある食物等を盛るために使用された器です。京の内跡から出土したものは4点ありましたが、復元可能な資料は1点でした。



らいもんたいおおばち
雷文帯大鉢

口径 26.8 ～ 30.6cm　器高 12.3 ～ 13.9cm　底径 10.2cm

口縁は直口口縁で、外側面には口縁部は雷文帯、胴部には牡丹唐草文を施しています。内側面には、牡丹唐草文を施しています。底部は欠損部分が多いため、詳しくはわかりません。

壺（身）

口がすぼまり、胴部がふくらんだ形をし、食物や酒等を入れる容器として使用されました。京の内跡からは 11 個体出土しており、数種類の文様等が確認されています。底になっている部分は、別に作られ、釉薬をかけて接着させたと考えられます。内底及び高台は、釉薬が掻き取られています。

吉祥字文壺（きっしょうじもんつぼ）
口径 25.5cm　器高 26.3cm　底径 19.0cm

頸部は短く、胴部がふくらんでいます。外側面胴部上部には「清香美酒」銘を 1 文字ずつ配し、その間を花唐草文で埋めています。写真に見えるのは「酒」です。下部は鎬蓮弁文（しのぎれんべんもん）を施しています。

きくからくさもんつぼ
菊唐草文壺
口径 23.2cm　器高 24.8cm　底径 17.5cm

頸部は短く、胴部がふくらんでいます。胴部上部は、６つに仕切り、菊文等の花文を施しています。下部は蓮弁文を描いています。

はなからくさもんつぼ
花唐草文壺
口径 24.1cm　器高 24.7cm　底径 18.5cm

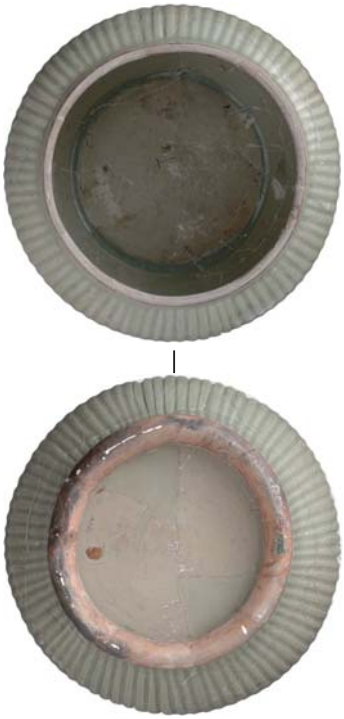
頸部は若干短く、胴部は肩が少し張り出しています。胴部上部には花唐草文、下部に蓮弁文を描いています。

ぼたんからくさもんつぼ
牡丹唐草文壺
口径 20.7cm　器高 22.2cm　底径 17.2cm

頸部は若干短く、胴部は少し丸味をもたせています。胴部上部に牡丹唐草文と花文を施し、下部に蓮弁文を施しています。

れんべんもんつぼ
蓮弁文壺
口径 18.8cm　器高 19.5cm　底径 17.0cm

頸部は長く、胴部全面に蓮弁文を描いています。



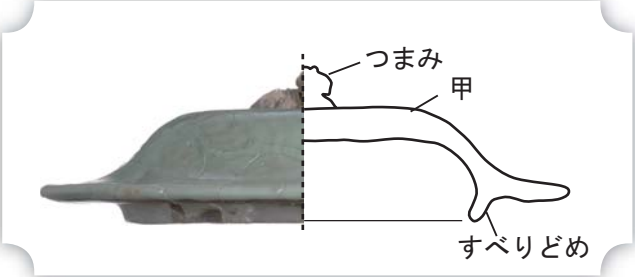
れんべんもんつぼ
蓮弁文壺

口径 24.0cm　器高 23.3cm　底径 19.8cm

頸部は長く、胴部全面に蓮弁文を描いています。

壺（蓋）

身と合致しないものもありますが、前出の壺（身）の蓋かと思われます。



きっしょうじもんしししはりつけもんふた
吉祥字文獅子貼付け文蓋

外径 30.2cm　内径 20.2cm　高さ 8.3cm

蓋甲頂部に素焼きの獅子を配し、摘（つま）みとしています。文様は、花弁を４枚描いています。釉薬は表面にのみ施されています。

れんべんもんつぼ
蓮弁文壺
外径 26.0cm　内径 15.7cm　高さ 8.2cm

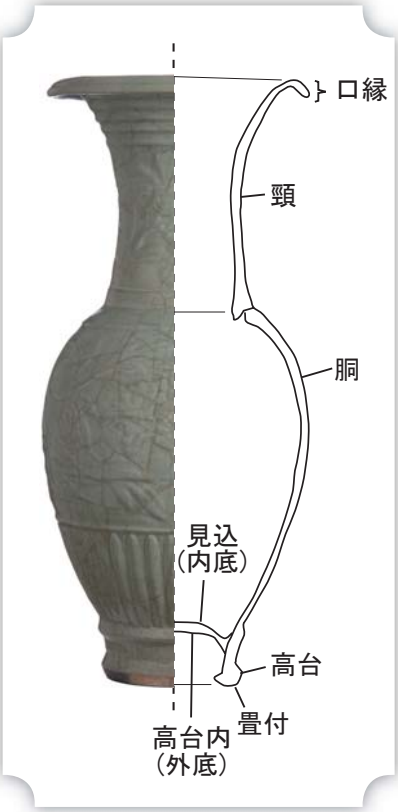
蓋甲頂部に宝珠状の摘みをつけています。文様は蓮弁文を描いています。
※宝珠：先端が尖った球状のものをいいます。仏を表現する仏具として考えられています。

れん　か　から　くさ　もん　ふた
蓮花唐草文蓋
外径 26.1cm　内径 15.4cm　高さ 7.2cm

６箇所に反りをつけて蓮の葉を表現した蓋です。蓋甲頂部に宝珠状の摘みをつけています。文様は牡丹唐草文を施しています。

瓶

口が小さく、胴部が伸びた形をし、水等の液体を入れるものとして使用されたものです。京の内跡からは双耳瓶、玉壺春瓶（ぎょっこしゅんぴん）及び花瓶が確認されています。花瓶（牡丹唐草文瓶）は花を生けるために使用されたものと考えられています。



牡丹唐草文瓶（ぼたんからくさもんびん）

口径 26.7cm　器高 62.7cm　底径 14.6cm

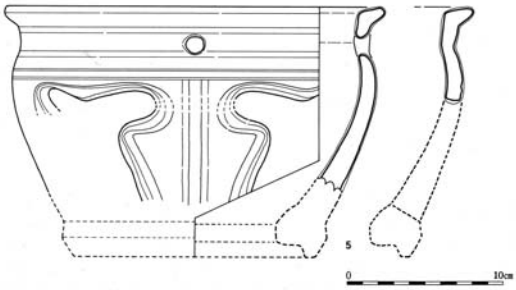
大花瓶であり、口縁はラッパ状に開き、先端を下方へ折り曲げています。文様は、頸部上部に６本の圏線、中央に牡丹唐草文を施し、胴部上部に牡丹唐草文、下部に蓮弁文を描いています。

そう じ びん
双耳瓶
口径 10.6cm　器高 26.4cm　底径 10.2cm

２箇所の耳に輪が取り付けられた瓶です。耳には獣が模られ、胴部下部に蓮弁文が描かれます。胴部中央にも文様がありますが、釉薬が厚いため詳しくはわかりません。高台は復元しています。

器台

上に瓶等の器を載せるものとして使用されたものです。本資料は下部が欠損していますが、他の類例資料を参考とすると、胴部には葉状に透かしが設けられたと考えられます。



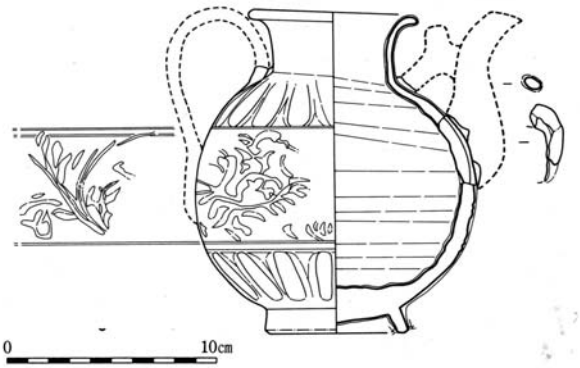
す　さんようもん き だい
透かし三葉文器台
口径 24.5cm　器高 16.8cm　底径 15.4cm

水注

把手と注ぎ口がついており、水等の液体を注ぐものとして使用されたものです。京の内跡からは、頸部が長いものと短いものが確認されています。

ぼたんからくさもんすいちゅう
牡丹唐草文水注
口径 6.4cm　器高 23.6cm　底径 6.8cm

頸部が長い水注です。頸部と注ぎ口は雲文で繋がっています。文様は、胴部中央に花唐草文、下部に蓮弁文を描いています。高台は復元しています。



ぼたんからくさもんすいちゅう
牡丹唐草文水注
口径 7.2 ～ 7.8cm　器高 14.8cm　底径 6.8cm

頸部が短い水注です。把手と注ぎ口は欠損していますが、類例資料等を参考とすると、図のようになると考えられています。文様は、胴部上部と下部に蓮弁文、中央に牡丹唐草文を描いています。

（知念隆博）

沖縄本島出土の大型青磁
～流通と消費をグスクと集落遺跡から考える～

はじめに

琉球列島各地にある 14 ～ 15 世紀の遺跡からは例外なく多量の青磁が出土しています。それは当時において主な輸入品であり、また中継貿易を行う上での交易品として取り扱われていたからです。それを示す事柄を沖縄の文献資料の中で最も古いとされる『歴代宝案（註1）』巻 40 の中に見ることができます。その中では 1425 年に琉球国中山王から暹羅国（註2）へもたらした交易品の中に大量の「大青盤」「小青盤」「小青碗」といった青磁が含まれているのを確認することができます。更に『明実録（註3）』では 1404 年に青磁の一大生産地である龍泉窯まで琉球国南山王の使節が磁器を買い付けに赴いているといった記録も見ることができます。15 世紀前半における青磁は主に中国・龍泉窯及びその周辺で焼造されていたことから、琉球国は青磁を中国から輸入し、再度、東南アジア各地域に向けて輸出していました。琉球国は陶磁器については主に青磁を中継貿易の品として取り扱っていたこと、遺跡から大量に出土していることをあわせて考えると、当時の琉球では陶磁器の中では青磁がとりわけ好まれていたことが窺えます。すなわち青磁は、琉球を介して東南アジアへ向けて大量に輸出し、同時に沖縄本島内でも消費されていたことが考えられます。

しかし、大量に出回っていた青磁の中でも瓶や壺、水注、香炉といった大型製品、もしくは特殊な形態の製品については、碗や皿といった小型製品と比べると出土点数は限られ、また出土遺跡数も劇的に少なくなります。その理由として、大型製品は碗、皿のような大量生産を前提としておらず、また精製品にほぼ限られてくることから生産数が圧倒的に少なくなることが挙げられます。とりわけ首里城京の内跡から出土する大型青磁は、琉球王国が朝貢貿易によって皇帝から下賜された品も含まれていることから、当時においてもかなりの希少性を有するものであったと言えます。

他方で希少性を有する大型青磁が大規模なグスクや寺院から多く出土し、集落遺跡についてはそれ程多く出土していないという傾向が見られます。しかし、沖縄本島内でどの程度普及し、どのような使われ方をしていたのか明確なことは判っていません。

ここでは沖縄本島内の各遺跡で出土している大型青磁の状況を示し、遺跡の違いから見ることができる大型青磁の様相について触れ、最後に琉球列島におけるその位置付けについて述べていきたいと思います。

（註 1）琉球王府の外交文書および文案を集成したもの。

（註 2）現在のタイ国。

（註 3）中国の明朝（1368 ～ 1644）の太祖洪武帝から熹宗天啓帝までの 13 種の実録の総称。

１．沖縄本島における大型青磁の輸入時期

龍泉窯において大型の器皿が生産できるようになったのは元代（1271 ～ 1368）後期 14 世紀に入ってからで、西アジアからの需要が増加したのに伴って窯場が増加、明代になると窯構造の変化により大型製品が生産できる条件が満たされていく状況にありました（朱 1989,1990,1998）。琉球列島にもたらされた大型青磁はまさにこの状況下で焼造されたものであり、琉球王国成立時において交易による権力を誇示するための品として積極的に輸入されるようになりました。

首里城の中でも最も多く大型青磁が出土している京の内跡の酒会壺や瓶、盤は 15 世紀前半に作られた可能性が指摘されています（亀井 2001）。首里城の他地区から出土している大型青磁に関しても同タイプの瓶や壺が出土していることから、それらの多くが 15 世紀前半に入ってきたものであると言うことができます。首里城京の内跡からは酒会壺や瓶、盤以外に水注や香炉、器台といった大型青磁が出土しており、これらも酒会壺や瓶、盤に伴って出土していることからやはり 15 世紀前半頃に首里城へもたらされたものと評価することができます。例外的に二階殿地区からは 13 世紀後半から 14 世紀中葉まで遡る壺、盤が出土していますが、これらはアンティークとして後代に持ち込まれたものと考えられます（瀬戸 2006）。また中継貿易の品においては、

盤が先に紹介した『歴代宝案』にある「大青盤」を示すと考えられ、1425 年から 1470 年までに 20 箇ずつ 42 回にわたって、総計約 760 箇が東南アジア各地へ輸出されている事が窺えます（金沢 2008）。

このように概ね 15 世紀前半を中心に、大型の青磁が大量に中国から入ってきていると言え、それは明代における陶磁器生産の事情と深い関係がありました。加えて明の対外政策との関わりも無視することはできません。1369 年に元を北へ逐(お)いやり、中国全土を支配した明は周辺諸国との間で名義的な君臣関係を築き上げていきます。これを冊封体制と言い、琉球中山王も明との間に 1404 年、冊封の関係を結び、1 年に 1 回、正式な使者を中国へ派遣することになりました。このことはまた明の皇帝から陶磁器を含む多くの高級品が下賜され、そして進貢の名目で中国沿岸部の港湾において、私的に物品を取引していく状況が新たに生まれたことを意味しています（佐久間 1975）。一方で明では、福建や浙江沿岸における治安悪化に伴って 1372 年に海禁令が敷かれます。この海禁令は徐々にその内容が変化していき、14 世紀末から 15 世紀初めに入ると私貿易の禁止や中国人の海外渡航禁止といったような形になっていきます（檀上 2006）。更に、中国沿海部や島嶼部に居住している人々を内陸部へ移住させるなどの強硬な政策を押し進めていきました（檀上 2007）。このような明の徹底した対外政策は琉球にとって、中継貿易を行う上では有利に働いていきます。すなわち中国製品を独占に近い形で買い入れ、中国以外の東アジア各地に転売していく方法によって莫大な利益を上げていくことになります。ステータスシンボルとしての大型青磁を求める際は、琉球を通して入手する方法が 15 世紀の東アジアではスタンダードであったと思われます。

以上のことから、大型青磁が本格的に入ってくるのは冊封体制に琉球が組み込まれていく 14 世紀後半からと考えられ、15 世紀に入るとそれらの出入りが増加していくといった一連の流れを見て取ることができます。

2．グスクにおける大型青磁の出土状況

瓶、壺、鉢、水注、蓋、器台といった大型の器種は碗や皿といった日常生活で使用する小型の器種と異なり、自己の権力を誇示する物、すなわちステータスシンボルとしての要素が含まれます。前章では 14 世紀後半になると大型青磁が本格的に入ってくることについて詳しく触れていきましたが、このことは他者に対して優位性を示す道具立てとしての青磁が意識され始めたことを意味しています。沖縄本島では 14 世紀に入ると石積みグスクが出現し、集落とは距離を置いた居住空間を創り出します。そこに按司と呼ばれる在地首長が拠点をはり、14 世紀中頃にはその居住空間が大規模化されていきます。大規模化したグスクは主に丘陵上に築かれていることから、集落を眼下に見据えた形で、ステータスシンボルとしての居住空間となっていきます。このことを踏まえながら、まずはグスクにおける大型青磁のあり方がどのようなものであったか見ていきたいと思います。

表1に示すように首里城、今帰仁グスク、勝連グスク、久米島の具志川グスクからは多種多様な大型青磁が多く出土しているのが分かります。その中でも首里城、今帰仁グスクに関しては人形や仏像、燭台(しょくだい)といった特殊な器形の青磁が出土していることから、中国との間にかなり確実な交易ルートを有していたことが想定されます。両遺跡とも王国の中心地となったグスクで、明と冊封関係を結び朝貢貿易を行っています。勝連グスク、久米島の具志川グスクにおいては壺、蓋、瓶、鉢、器台といったよく沖縄本島の遺跡で出土する大型製品が揃って、更に 10 点以上まとまって見られる器種もあります。おそらく頻繁に大型青磁を搬入できる条件が勝連グスク、久米島の具志川グスクに整っていた可能性が指摘されます。加えて大型青磁以外にも元様式青花（註 4）の大型製品が両遺跡共にまとまって出土していることから、朝貢による公式な交易ではないものの私的で有力な搬入ルートを有していたものと思われます。

上記のような4ヶ所の石積みグスクには及びませんが、複数の大型青磁が確認されているグスクも見ることができます。浦添グスクや糸数グスク、座喜味グスク、大里グスクのように 2 器種以上でかつ 2 点以上の大型青磁が出土しているグスクです。これらは何れも大規模な石積みグスクの範疇(はんちゅう)に入り、やはりステータスシンボルとしての大型青磁を有していたと言えるでしょう。しかし、種類としても量的にも限られることから、大型青磁を搬入できるものの、仲介者を通しての搬入といったような直接的な搬入ルートではない、限られた条件の下で搬入されていた可能性が挙げられます。

（註 4）元（1271 ～ 1368）時代を中心に景徳鎮で生産された青花（染付）の一群。

表１　グスク出土の青磁一覧表

	遺跡名	所在地	青磁										備考	文献
			盤	高台付杯	香炉	水注	瓶	壺	蓋	鉢	器台	その他		
1	今帰仁グスク	今帰仁村 今泊	1097	1	14	3	6	5	4	3	1	仏像１、燭台３、小壺１、合子１、擂鉢１	個体数を集計	「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ」『今帰仁村文化財調査報告書』第９集　今帰仁村教育委員会　1983「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ」『今帰仁村文化財調査報告書』第14集　今帰仁村教育委員会　1991「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ」『今帰仁村文化財調査報告書』第14集　今帰仁村教育委員会　2008
2	仲尾次グスク	名護市 仲尾次	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	「フガヤ遺跡　田井等遺跡　羽地間切番所跡遺跡　仲尾次上グスク遺跡」『名護市文化財調査報告』８　名護市教育委員会　1988
3	※１ 山田グスク	恩納村 山田	—	—	—	—	—	—	—	—	—	盤、酒会壺、香炉、瓶、合子が出土しているが点数は不明		『山田グスク』恩納村教育委員会　1990
4	屋良グスク	嘉手納町 屋良	86	—	1	—	—	—	—	26		杯９		「屋良グスク」『嘉手納町文化財調査報告書』第１集　嘉手納町教育委員会　1994
5	座喜味グスク	読谷村 座喜味	16	—	3	—	—	1	1	—		杯１		『座喜味城跡－環境整備事業報告書（Ⅱ）－』読谷村教育委員会
6	越来グスク	沖縄市 越来	25	—	—	1	—	2	3	1		器種不明７		「越来城」『沖縄市文化財調査報告書』第11集　沖縄市教育委員会　1988
7	北谷グスク	北谷町 大村	24	—	—	—	—	2	—	2		杯２		「北谷城」『北谷町文化財報告書』第１集　北谷町教育委員会　1984　「北谷城」『北谷町文化財報告書』第11集　北谷町教育委員会　1991　「北谷城」『北谷町文化財報告書』第12集　北谷町教育委員会　1992
8	勝連グスク	うるま市 南風原	18	—	5	—	1	5	6	15		擂鉢３　杯１ 花生１		「勝連城跡」『勝連町の文化財』第11集　勝連町教育委員会　1990　「勝連城跡」『勝連町の文化財』第６集　勝連町教育委員会　1984　「勝連城跡」『勝連町の文化財』第５集　勝連町教育委員会　1983　『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会　1965　『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会　1966
9	具志川グスク	うるま市 具志川	193	—	—	—	—	※１ 43	2	—		小壺１　杯４		「具志川グスクⅠ」『うるま市文化財調査報告書』第４集　うるま市教育委員会　2006
10	伊波グスク	うるま市 伊波	91	—	—	—	—	7	—	—		—		「伊波城跡」『石川市文化財調査報告』第５集　石川市教育委員会 2003
11	中城グスク	中城村 泊	23	—	—	—	—	—	2	—		杯４		「中城城跡」『中城村の文化財』第４集　中城村教育委員会　2007
12	新垣グスク	中城村 新垣	15	—	—	—	—	—	—	—		杯１	出土せず	「新垣グスク」『中城村の文化財』第９集　中城村教育委員会　2007
13	ヒニグスク	北中城村 喜舎場	—	—	—	—	—	—	—	—		—	出土せず	「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1966
14	浦添グスク	浦添市 仲間	270	—	2	—	—	7	6	—		袋物１、杯５、白磁高台付杯１、小型壺１		「浦添城跡発掘調査報告書」『浦添市文化財調査報告書』浦添市教育委員会　1985
15	首里城跡	那覇市 首里当蔵	2019	16	128	16	267	445	157	136	24	袋物25、花盆台５、蓋置３、水滴１、燭台１、水注または瓶５、天目台１、法螺貝１、擂鉢３、駒１、火取り１、形象物４、形象物または袋物１、人形１		※２を参照のこと。
16	瀬長グスク	豊見城市 瀬長	19	—	2	—	—	4	—	—		杯２		「瀬長グスク他範囲確認調査報告書」『豊見城市文化財調査報告書』第８集　豊見城市教育委員会　2008
17	クニンドー遺跡	南風原町 津嘉山	17	—	1	—	3	4	—	1		—		南風原町教育委員会「クニンドー遺跡」『南風原町文化財調査報告書』第２集　1996　南風原町教育委員会「クニンドー遺跡（Ⅱ）」」『南風原町文化財調査報告書』第５集　2005
18	※１ 南山グスク	糸満市 高嶺		—	1	—	—	—	1	—		—		『南山城跡第一次緊急発掘調査概要』糸満市教育委員会　1984
19	佐慶グスク	糸満市 山城	27	—	1	—	1	—	—	—		小杯１		糸満市教育委員会「佐慶グスク・山城古島遺跡」『糸満市文化財調査報告書』第８集　1994
20	※３ 真栄里グスク	糸満市 真栄里	4	—	—	—	—	—	—	—		—	出土せず	「真栄里貝塚ほか発掘調査報告」『糸満市文化財調査報告書』第12集　糸満市教育委員会　1996　「真栄里貝塚発掘調査報告」『糸満市文化財調査報告書』第16集　糸満市教育委員会　1999
21	※１ 具志川グスク	糸満市 喜屋武	5	—	—	—	—	1	—	—		—		「よみがえれ古海城」『国指定史跡具志川城跡保存修理事業概報』№２　糸満市教育委員会　2007
22	※３ 仲栄真グスク	南城市 富里	3	1	—	—	—	1	—	—		—		玉城村教育委員会「玉城村の遺跡」『玉城村文化財調査報告書』第２集　1995

	遺跡名	所在地	青磁										備考	文献
			盤	高台付杯	香炉	水注	瓶	壺	蓋	鉢	器台	その他		
23	※1 八重瀬グスク	八重瀬町 八重瀬	—	—	—	—	—	—	—	—		—	出土せず	東風平町教育委員会「八重瀬グスク調査概報」『東風平町文化財調査報告書』第1集 1979
24	※3 多々名グスク	具志頭村 玻名城	4	—	—	—	—	—	—	—		—	出土せず	具志頭村教育委員会「具志頭村の遺跡」『具志頭村文化財調査報告書』第3集 1986
25	※3 具志頭グスク	具志頭村 具志頭	—	—	—	—	—	—	—	—		—	出土せず	具志頭村教育委員会「具志頭村の遺跡」『具志頭村文化財調査報告書』第3集 1986
26	糸数グスク	南条市 糸数	380	—	3	—	—	2	2	—		青磁摺鉢5		玉城村教育委員会「糸数城跡－発掘調査報告Ⅰ－」『玉城村文化財調査報告書』第1集 1991
27	※3 大城グスク	南城市 大城	1	—	1	—	—	—	—	—		—	表採	「大里村の遺跡」『大里村文化財調査報告書』第1集　大里村教育委員会　1992 「大里城跡」『大里村文化財調査報告書』第3集　大里村教育委員会　1998 「大里城跡」『大里村文化財調査報告書』第4集　大里村教育委員会　2001
28	大里グスク	南城市 大里	22	—	—	—	3	1	—	—		青磁摺鉢1		「大里村の遺跡」『大里村文化財調査報告書』第1集　大里村教育委員会　1992
29	志喜屋グスク	南城市 志喜屋	3	—	—	—	—	1	1	—		—		「志喜屋グスク」『知念村文化財調査報告書』第5集　知念村教育委員会　1994
30	具志川グスク	久米島町 仲村渠	13	1	5	—	5	20	7	—	1		表採	久米島町教育委員会「具志川城跡発掘調査報告書Ⅰ」『久米島町文化財調査報告書』第2集　2005　久米島町教育委員会「具志川城跡発掘調査報告書Ⅱ」『久米島町文化財調査報告書』第4集　2008
31	宇江城グスク	久米島町 宇江城	33	2	7	1	5	10	16	9	2	杯9、摺鉢2	図示数を集計	「宇江城城跡発掘調査報告書」『久米島町文化財調査報告書』第5集　2008　久米島町教育委員会
32	佐敷グスク	佐敷町 佐敷	42	—	—	—	6	5	2	1	1	壺か瓶1		『佐敷グスク』佐敷町教育委員会 1980 「佐敷上グスクほか範囲確認長諫報告書」『沖縄県南城市文化財調査報告書』第1集　南城市教育委員会　2006

※1 概報のみ刊行

※2
上原静「首里城城郭西のアザナの調査」『文化課紀要』第10号　沖縄県教育庁文化課　1994
沖縄県教育委員会『沖縄県文化財調査報告書』
第88集「首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査－」1988、第120集「首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告－」1995、第132集「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－」1998、第133集「首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－」1998
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』
第1集「首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－」2001、第3集「首里城跡－下之御庭・用物座・瑞泉門跡・漏刻門跡、廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－」2001、第9集「首里城跡－継世門周辺地区発掘調査報告書－」2002、第14集「首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－」2003、第18集「首里城跡－城の下地区発掘調査報告書－」2004、第20集「首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－」2004、第27集「首里城跡－上の毛及び周辺地区発掘調査報告書－」2005、第28集「首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－」2005、第29集「首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－」2005、第34集「首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－」2006、第44集「首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－」2007、第45集「首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－」2007、第47集「首里城跡－下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書－」2008、第48集「真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅲ）－」2008

※3 試掘調査

最後に2器種以下で各器種1点以下のグスクについて触れておきます。大城グスクや中城グスクといった大規模な石積みグスクもこれらの範疇に入っていますが、試掘調査または、調査面積が限られているため実態を表していないものと思われます。実際には志喜屋グスク、新垣グスク、仲尾次グスクといった小規模な石積みグスクや、土から成るグスクがこれらの範疇に入ります。これらは大型青磁が全く入ってこない、もしくは入ってきても偶然的にもたらされたものと考えられ、基本的に搬入ルートを有していないものと位置付けることができます。

このように大規模な石積みグスクについては大型青磁の種類や量を複数見ることができる一方で、小規模な石積みグスクや土から成るグスクではそれらがあまり見られないか、皆無であると言うことができます。また大規模な石積みグスクの中でもかなりまとまって大型青磁が入っているのを見ることができます。首里城、今帰仁グスクは冊封体制の中で明へ朝貢していた関係により直接、中国産品を搬入できるルートが存在していたことがこれらの大型青磁を大量にもたらした背景として捉えることができます。また、久米島の具志川グスクにおいては、久米島が琉球と中国間における航路上に位置していることで、大型青磁が搬入され易い状況になっていたこと、そして勝連グスクにおいては沖縄本島東海岸において随一の良港（註5）が近接していることから集積地としての機能が果たし易かったことにより、大型青磁がまとまって搬入されたものと考えることができます。

(註 5)15 世紀における琉球列島の様子を描いたとされる『琉球国図』においては現在の那覇港とうるま市勝連南風原、今帰仁村今泊の 3 箇所に皆津、要津、浦などの記載が見られることから、沖縄本島における 15 世紀の代表的な港として位置付けることができる。

3．集落遺跡における大型青磁の出土状況

表2のように集落遺跡においてはグスクと比べて相対的に大型青磁がまとまって出土する遺跡は少なくなっています。前章で示した出土状況を集落遺跡に当てはめてみると、多様な器種がまとまって見られ、かつ特殊な器形の青磁が出土している遺跡には今帰仁ムラ跡があります。また近接しているという意味では首里城周辺にある崎山御嶽遺跡、首里旧真和志村跡、御細工所跡、更に天界寺跡や円覚寺跡も加えると今帰仁ムラ跡に匹敵する量と種類の大型青磁が出土しています。いずれも中山、北山王国の拠点となっているグスクの直下に所在している集落であることから、有力臣下の居住地や王府に関わる宗教施設などが集中して配置されており、大規模なグスクから出土する大型青磁を凌ぐ質と量の大型青磁が搬入されていたものと考えられます。

次に器種が揃い、そして1器種において 10 点以上が出土している遺跡は喜友名貝塚・喜友名グスクⅢ地区、伊礼原 D 遺跡、ヒヤジョー毛遺跡があります。これらの 3 遺跡が大型青磁をまとめて搬入することができた理由について詳しくは分かりませんが、大型青磁の有力な搬入ルートを有していたことと、そのような状況下にありながら伊礼原 D 遺跡においては石積みグスクのような居住空間を創り出さなかった集落のあり方を窺うことができます。但し、同じ条件で設定した勝連グスクや久米島の具志川グスクでは元様式青花が出土していますが、喜友名貝塚・喜友名グスクⅢ地区、伊礼原 D 遺跡、ヒヤジョー毛遺跡では全く出土していないことから、搬入ルートの確実性は先の 2 遺跡よりも低いと考えられます。

また 2 器種以上でかつ 2 点以上の大型青磁が出土しているといった、一定量の大型青磁が見られる集落遺跡も多数掲げることができます。これらには、浦添原遺跡、山城古島遺跡といった大規模な石積みグスクに隣接している集落遺跡や、那覇港の集積地として機能していたと考えられる渡地村跡といったように、大型青磁

表２　集落遺跡出土の青磁一覧表

	遺跡名	所在地	青磁										備考	文献
			盤	高台付杯	香炉	水注	瓶	壺	蓋	鉢	器台	その他		
1	伊是名元島遺跡	伊是名村 伊是名	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	「伊是名元島遺跡」『伊是名村文化財調査報告書』第 10 集　2000
2	天底後原遺跡	今帰仁村 仲宗根	6	—	—	—	—	—	—	3		杯 3		今帰仁村教育委員会「天底後原遺跡」『今帰仁村文化財調査報告書』第 21 集　2006a
3	今帰仁ムラ跡	今帰仁村 今泊	269	2	19	—	25	26	1	—	3	杯 54、器台 3, 置物 2、水滴 1		今帰仁村教育委員会「今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ」『今帰仁村文化財調査報告書』第 20 集 2005　今帰仁村教育委員会「今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ」今帰仁村文化財調査報告書』第 23 集 2006c
4	宇茂佐古島遺跡	名護市 宇茂佐	2	—	—	—	—	—	—	—	—	袋物 1		名護市教育委員会「 宇茂佐古島遺跡 」『名護市文化財調査報告』10　1992
5	漢名ウェーヌアタイ遺跡	宜野座村 漢名	8	—	1	—	—	—	—	—	—	杯 5		宜野座村教育委員会「 漢那ウェーヌアタイ遺跡 」『宜野座村乃遺跡』（9）1990
6	漢名遺跡	宜野座村 漢名	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	宜野座村教育委員会「 漢那遺跡 」『宜野座村乃遺跡』（4）　1984
7	伊波城跡周辺	うるま市 伊波		—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	石川市教育委員会「伊波丘陵周辺遺跡分布調査」『石川市文化財調査報告』第 6 集　2004
8	平敷屋古島遺跡	うるま市 勝連平敷屋	2	—	—	—	—	—	—	1	—	杯 1		「東女美川原遺跡 平敷屋古島遺跡 桃原貝塚」『うるま市文化財調査報告書』第 7 集　2009、うるま市教育委員会「市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　平成 17 年度」『うるま市文化財調査報告書』第 2 集　2006
9	神山遺跡	うるま市 伊計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	沖縄県教育委員会「伊計島の遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第 41 集 1981
10	伊礼原 B 遺跡	北谷町 伊平	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—		北谷町教育委員会「伊礼原遺跡」『北谷町文化財調査報告書』第 26 集 2007
11	伊礼原 D 遺跡	北谷町 伊平	16	—	2	—	10	5	—	9	—	—	伊礼原 D 遺跡と隣接、酒会壺 2 点	北谷町教育委員会「伊礼原 D 遺跡」『北谷町文化財調査報告書』第 28 集 2008

	遺跡名	所在地	青磁										備考	文献
			盤	高台付杯	香炉	水注	瓶	壺	蓋	鉢	器台	その他		
12	伊礼原E遺跡	北谷町伊平	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	伊礼原B遺跡と隣接	北谷町教育委員会「伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡」『北谷町文化財調査報告書』第27集　2008
13	後兼久原遺跡	北谷町桑江	185	—	1	—	1	—	—	6	—	杯2、袋物2		北谷町教育委員会「後兼久原遺跡」『北谷町文化財調査報告書』第21集 2003　沖縄県立埋蔵文化財センター「後兼久原遺跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター』22集　2004
14	喜友名山川原第7遺跡	宜野湾市喜友名	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	宜野湾市教育委員会『喜友名遺跡群』1984
15	喜友名貝塚・喜友名グスクⅢ地区	宜野湾市喜友名	64	1	—	—	11	3	3	2	—	擂鉢1		沖縄県教育委員会「喜友名貝塚・喜友名グスク」『沖縄県文化財調査報告書』第134集　1999
16	嘉数トゥンヤマ遺跡	宜野湾市嘉数	71	1	11	—	5	33	—	—	—	袋物19		宜野湾市教育委員会「嘉数トゥンヤマ遺跡Ⅰ」『宜野湾市文化財調査報告書』第43集　2008
17	森川原第一遺跡	宜野湾市森川	8	—	1	—	2	—	3	1	—	小壺1		宜野湾市教育委員会「真志喜森川原遺跡」『宜野湾市文化財調査報告書』第18集　1994
18	大山前門原第二遺跡	宜野湾市大山	5	—	—	—	—	2	1	6	—	—	出土せず	宜野湾市教育委員会「大山前門原第二遺跡」『宜野湾市文化財調査報告書』第30集　1994
19	当山東原遺跡	浦添市当山	29	—	2	—	1	—	1	—	—	杯1		浦添市教育委員会「当山東原遺跡」『浦添市文化財調査報告書』第33集 2003
20	浦添原遺跡	浦添市安波茶	23	—	2	—	2	1	2	—	—	小壺1、杯3、擂鉢1		浦添市教育委員会「浦添原遺跡」『浦添市文化財調査研究報告書』2005
21	内間遺跡	浦添市内間	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	浦添市教育委員会「市内遺跡発掘調査報告書（1）」『浦添市文化財調査研究報告書』2007
22	渡地村跡	那覇市通堂町	63	—	2	1	4	—	—	—	1	(器台は茶托受け)、香炉？1		沖縄県立埋蔵文化財センター「渡地村跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第46集　2007
23	ヒヤジョー毛遺跡	那覇市銘苅	109	1	2	—	20	1	1	—	—	杯1		那覇市教育委員会「ヒヤジョー毛遺跡」『那覇市文化財調査報告書』第26集　1994
24	首里旧真和志村跡	那覇市首里真和志	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	調査地点1のみ	那覇市教育委員会「首里旧真和志村跡」『那覇市文化財調査報告書』第68集　2005
25	※崎山御嶽遺跡	那覇市首里崎山	7	—	3	—	—	18	—	—	—	杯2		那覇市教育委員会「崎山御嶽遺跡」『那覇市文化財調査報告書』第67集 2005
26	※御細工所跡	那覇市首里真和志	12	—	4	—	—	4	2	—	—	杯1, 袋物11		那覇市教育委員会「御細工所跡」『那覇市文化財調査報告書』第18集 1991
27	安謝東原南遺跡	那覇市安謝	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	青磁碗1点のみ出土せず	那覇市教育委員会「安謝東原南遺跡 旧天久村古井戸遺跡」『那覇市文化財調査報告書』第45集　2000
28	高嶺古島遺跡	豊見城市高嶺	10	—	—	—	1		—	—	—	杯3		豊見城村教育委員会「高嶺古島遺跡」『豊見城村文化財調査報告』第4集 1990
29	渡嘉敷後原遺跡群	豊見城市平良	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	豊見城村教育委員会「高嶺古島遺跡」『豊見城村文化財調査報告』第4集 1990
30	宜保アガリヌ御嶽	豊見城市宜保	14	—	—	—	—	7	—	2	—	—	酒会壺2点	豊見城村教育委員会「渡嘉敷後原遺跡群」『豊見城村文化財調査報告書』第5集　1997
31	山城古島遺跡	糸満市山城	3	—	—	—	6	—	1	—	1	—		沖縄県教育委員会「佐慶グスク・山城古島遺跡」糸満市文化財調査報告書』第8集　1994
32	伊原遺跡	糸満市伊原	25	—	1	—	—	2	1	—	—	—		沖縄県教育委員会「伊原遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第73集　1986
33	大里前原遺跡	糸満市大里	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	南風原町教育委員会「津嘉山古島遺跡　仲間村跡A地点　仲間村跡B地点　津嘉山クボー遺跡」『南風原町文化財調査報告書』第8集　1994
34	津嘉山古島遺跡	南風原町津嘉山	45	—	—	—	2	—	—	8	—	袋物1		南風原町教育委員会「津嘉山古島遺跡　仲間村跡A地点　仲間村跡B地点　津嘉山クボー遺跡」『南風原町文化財調査報告書』第8集　1994
35	仲間村跡A地点	南風原町津嘉山	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	ピットは建物跡の可能性が低い。	南風原町教育委員会「津嘉山古島遺跡　仲間村跡A地点　仲間村跡B地点　津嘉山クボー遺跡」『南風原町文化財調査報告書』第8集　1994
36	玻名城古島遺跡B地点	八重瀬町多々名	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	出土せず	具志頭村教育委員会「具志頭村の遺跡」『具志頭村文化財調査報告書』第3集　1986
37	世名城古島遺跡	八重瀬町世名城	5	—	—	—	—	—	1	—	—	壺または瓶1		八重瀬町教育委員会「世名城古島遺跡」『八重瀬町文化財調査報告書』第1集　2008

※柱穴は検出されていないが建物跡が想定される遺跡

が搬入される場所に隣接または直接搬入される状況下にあった集落遺跡が見られます。

そして、2 器種以下で各器種1点以下といった、ほとんど大型青磁が搬入されない集落遺跡に関しては零細的な集落であったものと考えられます。伊波城跡周辺遺跡のように石積みグスクに隣接している集落遺跡も見られますが、ほとんどが石積みグスクを伴っていない集落遺跡となっています。

全体的に概観すると、大型青磁の出土が2器種以上で1器種あたり 2 点以上が確認されている集落遺跡は 35 遺跡中7遺跡と全体の約 20%しかありません。対してグスクでは 23 遺跡中 14 遺跡と割合が約 61%まで上ります。このことから集落遺跡においてはグスクと比べてステータスシンボルとしての青磁が少なかったことや、直接的そして大量に大型青磁が搬入される状況は希有であったことを意味しています。更に大型青磁がまとまって出土している集落遺跡の多くは大規模な石積みグスクに隣接している事例が多く見られることから、その搬入の仕方としては積極的に対外交易を行い、ステータスシンボルとしてのグスクを拠点とする在地首長の権限に依存した形で大型青磁がまとまって搬入されていたと指摘することができます。

表 3　宗教施設出土の青磁一覧表

	遺跡名	所在地	青磁										備考	文献
			盤	高台付杯	香炉	水注	瓶	壺	蓋	鉢	器台	その他		
1	浦添ようどれ	浦添市仲間	9	―	2	―	―	―	―	―	―			浦添市教育委員会『浦添ようどれⅢ』2007
2	円覚寺跡	那覇市首里当蔵	5	―	4	1	7	2	1	―	―	杯 1		沖縄県立埋蔵文化財センター「円覚寺跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 10 集　2002
3	天界寺跡 那覇市 1999	那覇市首里真和志	5	―	2	―	1	―	―	―	―	合子 1、水滴 1、角製品 3		那覇市教育委員会「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第 42 集　1999
	天界寺跡 那覇市 2000		7	―	2	―	3	1	―	―	―	杯 5、袋物 1，水滴 1		那覇市教育委員会「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第 43 集　2000
	天界寺跡Ⅰ		48	―	4	―	36	39	2	19	―	―		沖縄県立埋蔵文化財センター「天界寺跡Ⅰ」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 2 集　2001
	天界寺跡Ⅱ		393	8	53	3	215	96	10	17	1	小壺 3、杯 8、擂鉢 3（器台は花盆台 1）うち酒会壺 8		沖縄県立埋蔵文化財センター「天界寺跡Ⅱ」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 8 集　2002
4	玉陵	那覇市首里真和志	2	―	―	―	―	―	―	―	―	―	天界寺に関連する包含層か？	那覇市『史跡玉陵整備事業報告書』2004
	総計		469	8	61	3	255	136	12	36	1			

4．沖縄本島出土の大型青磁が意味するもの

大型青磁がグスクと集落遺跡とでその量と種類が異なるということを、出土する遺跡とそうでない遺跡との比率で見て行きましたが、他にもいくつか注目すべき点があるのでここで触れていくことにします。

まずはグスクの中でも大型青磁がほとんど出土していない事例に関しては、ステータスシンボルを有さないという意味では在地首長（按司）が自己権力を誇示しない、もしくは在地首長の拠らない場所であったことも想定されます。かつてグスク論争においては城郭説（名嘉、知念 1985）、集落説（嵩元 1969、1971）、聖域説（仲松 1961）、按司居館説（當眞 1985）と様々なグスクの性格についての説が出されましたが、ステータスシンボルを有さないグスクもあることからグスクは多様な性格を有しているものと捉えることが出来ます。

また大里グスク、座喜味グスク、北谷グスク、越来グスクは比較的規模の大きい石積みグスクであるもののあまり多くの大型青磁は出土していません。このことから構築物としては権力を誇示する要素が多分に見られますが、モノによる権力の誇示はあまり見られないと行った不釣り合いな状況を見て取ることができます。この意味するところとしては、かつてこれらのグスクにも大量の大型青磁が存在していたものの、グスクが廃棄される際に一括で移動された可能性を鑑みる必要があります。消耗品としての性格を有する小型の碗や皿と異なり、数が限られる大型製品はその維持・管理も厳密になされていたものと思われ、グスクの廃棄に伴って別の場所に運ばれたことを十分に考えることができます。更に首里城京の内跡や同二階殿地区のように、グスクとして機能している時に火災等により大型青磁が一括して廃棄される状況があったのか否かによってもその評価が分かれて

きます。対して集落遺跡は現在も集落として利用されている遺跡が多く見られることから、一括で大型青磁が移動される状況はグスクと比べて少なく、そのまま消費そして廃棄される割合が高いと言えます。このことからグスクと集落遺跡における大型青磁の出土状況を同レベルで評価することはできないと言えます。ただ少なくとも集落遺跡よりグスクの方が、出土した大型製品より本来有していた大型製品のほうが多かったと解することができます。

次に、これを考慮した上で、数量ではなく大型青磁の中でも一定数の遺跡で出土している壺、瓶、蓋、水注、鉢、器台といった器種数で見てみると、石積みグスクに匹敵ないし凌駕(りょうが)している集落遺跡をいくつか見ることができます。先述した今帰仁ムラ跡や浦添原遺跡、山城古島遺跡は、大規模なグスクが隣接しており、在地首長の求心性によって大型青磁が搬入された集落遺跡です。一方で在地首長の求心性とは無関係の伊礼原D遺跡、ヒヤジョー毛遺跡でも瓶や鉢といった大型青磁が4器種以上、出土しています。これは石積みグスクのような防御施設は有しないものの、可動性のあるステータスシンボルを有する居住空間が集落遺跡内に存在していたことを意味しています。

このように大型青磁が有するステータスシンボルとしての性格を考慮してみると在地首長が必ずしも石積みグスクを本拠地としていないということ、そして逆に石積みグスクが必ずしも在地首長の本拠地になっていないことが想定できます。

5．大型青磁の生産と流通の終焉　～まとめにかえて～

これまで沖縄本島における大型青磁の出土状況から見えてくる14,15世紀の地域社会のあり方に踏み込んできました。それを通して沖縄本島内での大型青磁がどのように取り扱われていたのか、そしてどのような場所で普及していたのか理解して頂けたかと思います。

これだけ多く取り扱われていた大型青磁はある時期を境に急激に減少し、沖縄本島内で見ることはほとんどなくなってしまいます。最後に15世紀後半から始まる琉球と明との交易衰退と中国における大型青磁生産の衰退について述べていくことにします。

沖縄本島へ本格的に青磁が搬入され始める直前の14世紀中頃、中国では景徳鎮窯で青花の技法と様式が完成し、青磁の一大生産地である龍泉窯と並ぶ陶磁器の供給地となっていきます。続いて1426年に明は景徳鎮に官窯である御器廠(ぎょきしょう)を設置すると（佐久間1962）陶磁器供給地としての龍泉窯の地位は次第に低下していきます。15世紀後半になると大型製品をはじめとした精製品は景徳鎮で生産され、それに反比例する形で龍泉窯では粗製の碗といった日用雑器の焼造にほぼ限定されていくようになります。一方で琉球の朝貢貿易も1440年代から下火になり始め、1460～70年代にかけては朝貢船の派遣頻度は急減していきます。これは明の倭寇対策に絡む琉球優遇政策の転換によるものとされています（岡本1999）。すなわち、このことは良質な中国製品の入手機会が減少していくことを意味し、大型青磁の沖縄本島内における供給は滞るようになっていきます。明からの優遇政策が転換された具体例を一つ紹介すると、中国や東南アジアへの派遣船がそれまで明から無償で下賜されていたのが15世紀後半から琉球王国側で建造、修理費用を負担するようになりました（山田2007）。このように、朝貢国である明からの恩恵を失ってしまうことで琉球は交易による利潤の減少を招き、そのことが従来まで築き上げていた中継貿易のシステムが変化していく主な原因となっていきます。

まとめると沖縄本島へ大量に青磁が運ばれてくる14世紀後半～15世紀前半は青磁生産が盛期で、大型青磁が首里城をはじめとする大規模なグスクに大量に搬入された後の15世紀後半には、中国では磁器の一大生産地が青磁の龍泉窯から青花の景徳鎮窯に替わっていました。青磁生産が減少したのとあわせて同時期に琉球の朝貢貿易と中継貿易が振るわなくなったことで、それ以降、大型青磁が交易品として表舞台に出てくることはありませんでした。その意味において琉球は大型青磁の最後の晴れ舞台を演出したプロデューサーであったと言え、中国の窯業史を語る上でも無視することのできない存在であると言えるでしょう。

また中国の窯業史のみならず、これら大型青磁を見ていくことで当時における琉球の対外関係の実態、そして沖縄本島内における地域の実態を解明していく上で欠かせない資料であり、今後も注目していく必要があるでしょう。

（山本正昭）

【参考文献】

仲松弥秀「グシク考」『沖縄文化』第５号　沖縄文化協会　1961

嵩元政秀「グシクについての試論」『琉大史学』創刊号 琉球大学史学会 1969

佐久間重男「明代景徳鎮窯業の一考察」『清水泰次博士伊藤記念明代史論叢』大安 1962

嵩元政秀「再び『グシク』について」『古代文化』第 23 巻第 9,10 号 古代學協會 1971

佐久間重男「明代の琉球と中国の関係」『明代史研究』第３号　明代史研究会　1975

當眞嗣一「考古学上より見た沖縄のグスク」『文化課紀要』第２号 沖縄県教育委員会 1985

名嘉正八郎、知念勇「防御より発生した初期グスク」『地方史研究』第 35 巻第４号　地方史研究協議会 1985

朱伯謙『龍泉青瓷研究』1989

朱伯謙『朱伯謙論文集』1990

朱伯謙「龍泉窯」『龍泉窯瓷器』芸術家出版社　1998

岡本道弘「明朝における朝貢国琉球の位置附けとその変化」『東洋史研究』第 57 巻４号　東洋史研究会　1999

山本正昭「グスク時代の石積み囲いについての一考察（上），（下）」『南島考古』第 18,19 号 沖縄考古学会 1999,2000

亀井明徳「首里城京の内出土陶磁器」『特別企画展　首里城京の内展―貿易陶磁からみた大交易時代―』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001

瀬戸哲也「首里城跡二階殿地区出土の中国・ベトナム陶磁」『東洋陶磁』第 35 号　東洋陶磁学会 2006

金沢陽「『歴代宝案』と明代貿易陶磁の実相」『出光美術館研究紀要』第 13 号 出光美術館　2008

宮城弘樹「グスクと集落の関係について（覚書）」『南島考古』第 25 号　沖縄考古学会　2006

檀上寛「明代海禁概念の成立とその背景」『東洋史研究』第 63 巻第３号　東洋史研究　2006

山田浩世「古琉球における海船の変遷とその状況」『よのづち』第３号　浦添市教育委員会文化部 2007

檀上寛「『国初寸板不許下海』考」『山根幸夫教授追悼記念論叢 明代中国の歴史的位相』2007

重要文化財公開　首里城京の内跡出土品展

大型青磁が彩る緑の空間
～海を渡った焼物～

発行年月日　　平成 22 年（2010）１月 23 日

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　098-835-8751　　FAX　098-835-8754
URL　http：/ / www.maizou - okinawa.gr.jp

印刷　　有限会社　サン印刷

〒 901-1111　沖縄県南風原町兼城577
TEL　098-889-3679　　FAX　098-889-4282

関連文化講座のご案内

第 36 回文化講座

「明代の朝貢体制 - 東アジアの国際秩序 -」

講師：檀上　寛　（京都女子大学教授）

日時：1 月 23 日（土）午後 2 時～ 4 時（開場 1 時半）

場所：沖縄県立埋蔵文化財センター研修室

※先着 140 名　申込不要

ギャラリートーク

1．1 月 30 日（土）10 時～ 11 時

2．　〃　15 時～ 16 時

※2は高校生以上の学生対象

担当：当センター主任　山本正昭

次回文化講座のご案内

第 37 回文化講座

「どこまでが琉球か　どこまでが日本か

～奄美考古学からみた新たなる視点～」

パネリスト：新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）

野崎拓司（喜界町教育委員会）

新里亮人（伊仙町教育委員会）

牛ノ濱修（株式会社パスコ・元鹿児島県立埋蔵文化財センター）

コーディネーター：山本正昭（沖縄県立埋蔵文化財センター）

日時：平成 22 年 2 月 6 日（土）13 時～ 17 時

場所：沖縄県立埋蔵文化財センター研修室

●開所時間　午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

●休所日　毎週月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）
年末年始（12 月 28 日～ 1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）
※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所

●交通　◇沖縄自動車道西原ＩＣより車で 7 分
◇市外線バスターミナル発　那覇バス 97 番
「琉大附属病院前」下車徒歩 1 分